

論文

北米・ハワイ沖縄系移民の SP レコード制作
—琉球古典音楽、沖縄民謡の録音をめぐって—

Musical Recordings by Okinawan Immigrants in North America and Hawaii :
Okinawan Classical Music and Okinawan Folk Music

高橋美樹 (高知大学教育学部・音楽学研究室)
Miki TAKAHASHI

Laboratory of Musicology, Faculty of Education, Kochi University, Kochi, Japan

ABSTRACT

The purpose of this paper is to analyze the recording number, singer, player and musical instrument in order targeted for SP records North America and Hawaiian Okinawa Immigrants produced. SP of Miyagi Record, Toho Record, and Kichi Record is taken up in a case in North America and Hawaii. The following four conclusions have been drawn. The first is that Katsujirou Nakasone and Oyagawa Yojin, who were recorded by Miyagi Record, played a central role in the association for the preservation of Okinawan music and performing Arts in North America after 1951. Recorded Ikumori Sakihara, who recorded by Toho record also supported activity as a vice-president of the Association of Okinawan music study in a North America after 1953. The person who participated in record production was achieving great contribution in organization of Okinawan classical music later. The second is the importance of Kiki Ikemiya, an Okinawan classical musician from Okinawa who visited Los Angeles in 1951. Ikemiya taught Okinawan classical music and recorded with Miyagi Record, and he contributed Sanshin (a long-necked plucked lute) of using. A music group by Eikichi Miyagi changed to "Miyagi Gensei-Kai" from "Miyagi Ongaku-Kai" in 1951, at Ikemiya's advice in Hawaii. The visit from Ikemiya, who in 1952 became the fifth chairperson at Nomura-ryu, had a great influence on North American Okinawan musical circles. 3rd, Nakasone, who taught Okinawan classical music using the Okinawan traditional musical score "Kunkunshi" in Peru and Los Angeles. 4th Okinawan immigrants wrote the words for the thought that home is missed and recorded an original song, which Ikumori Sakihara entitled "American Bushi." It created the sense of homesickness for Okinawa held by those living in North America. After migrating from the Naha harbor to Hawaii out of admiration, Eikichi Miyagi incorporated the sentiment of missing home into the lyrics of a song he recorded entitled "Akogare no Hawaii."

はじめに

沖縄の人々は琉球国時代から 21 世紀の現在まで、琉球古典音楽や沖縄民謡を地域社会の共有財産として受け継いできた。日常生活に音楽は必要不可欠であり、この点は沖縄から海外へ移民した人々にも共通する。

本論の目的は、北米・ハワイの沖縄系移民が制作した SP レコードを対象に、録音曲目、歌手・演奏家、使用楽器について整理することである。

筆者はこれまで沖縄から北米・ハワイ・南米へ移民した人々が制作した沖縄音楽レコードについて、研究を進めてきた（高橋 2007、2012、2016a、2016b 参照）。研究成果は 3 点にまとめられる。

1 点目として、移民自ら渡航する前に、沖縄や日本本土で沖縄音楽レコードを購入する。または移民した後、沖縄の家族から渡航先にレコードを送ってもらい聴取する方法が挙げられる。2 点目として、商業レコードを複製し個人で楽しむ、あるいは海賊盤を制作し沖縄系エスニック・コミュニティ内で販売する。3 点目として、古典や民謡の歌手がレコードを自主制作し販売していた（高橋 2016a）。本論では 3 つ目に挙げた研究成果を発展させ、北米・ハワイにおける事例を取り上げる。対象としたミヤギ・レコード、トーホー・レコード、吉レコードはレーベル情報を見る限り、いずれも自主制作盤だと推察される。現代で言うところのインディーズ・レコードに該当するだろう。

本論の研究方法は、以下の通りである。(1)レコードのレーベルに記載された文字情報から曲目、ジャンル、歌手・演奏家、使用楽器を整理する。(2)(1)の情報とデジタル化した音源を聴取し、照合する。(3)録音した歌手・演奏家の経歴について文献調査し、整理する。

本論では南風原文化センター、金武町教育委員会に寄贈されたレコードの中から、北米・ハワイで制作された SP に限定し、論を進める。なお、掲載する写真は全て筆者が撮影したものである。

1 ミヤギ・レコード制作の SP レコード

1 ではミヤギ・レコード制作による SP を取り上げる。1.1 では 1947 年制作、金武町教育委員会所蔵の SP 6 枚を対象とする。1.2 では 1951 年制作、南風原文化センター所蔵の SP 3 枚を対象とする。

沖縄の音楽は成立過程や表現様式によって、幾つかのジャンルに分類される。レコードのレーベルにもジャンル名が記載されているが、その範囲はレコード会社ごとに異なっている。そこで、レーベル情報とは別に、本研究の分析概念として、ジャンルに関する下記

首里の士族層によって育まれた歌を指す。本論では野村流『声楽譜^{くんぐんしー}工工四』上巻、中巻、下巻、続巻に掲載の曲目を「琉球古典音楽」に分類した。「沖縄民謡」とは日本や海外の沖縄系エスニック・コミュニティで伝承されてきた作者不詳の歌謡を指す。「新民謡」とは沖縄系エスニック・コミュニティで伝承されてきた作詞者、作曲者が明らかな歌謡を指す。

1.1 ミヤギ・レコード（1947 年制作）（表 1 参照）

初めに、レーベル情報を紹介する。実際のレーベルは、写真 1 SP『七尺節・揚七尺節』を参照されたい。

レーベルは黒地に白文字である。レーベル最上部には、商標として 2 つの 32 分音符（4 音）に挟まれた「M」マーク、レーベル名の「MIYAGI」が記された。中間部には「PRINTED IN U. S. A. COPYRIGHT 1947」と最下部に「羅府ミヤギレコードスタジオ」と刻印された。1947 年ロスアンゼルス「ミヤギレコードスタジオ」で録音し、米国で制作されたと読み取れる。ただし、録音場所が本格的なレコーディング・スタジオなのか、個人の自宅を「ミヤギレコードスタジオ」と呼んでいるのかは不明である。また、ミヤギ・レコードの活動状況はわかっていない。

1.1.1 録音曲目と使用楽器

SP 3 枚の曲目について、レコード盤ごとに紹介する。レコード番号 [TM 1007] は A 面《出砂節》、B 面《辺野喜節・芋の葉節》である。[TM 2000] は A 面《散山節》、B 面《七尺節・揚七尺節》である。[TM 2001] は A 面《述懐節（二揚調）》、B 面《百名節》で、計 8 曲である。ジャンル分類すると 8 曲全て古典音楽であった。

レーベルには「琉球音楽・野村流」と記載され、琉球古典音楽の流派の中でも野村安趙を祖とする野村流の歌を録音したことを示している。レーベルには演奏者の役割が曲目ごとに示された。歌唱は「唄」、^{さんしん}三線は「三味線」、弦楽器として「琴」、洋楽器の「マンドリン」が加わっている。全曲共、三味線と唄を仲宗根勝次郎、琴を仲宗根光子、マンドリンを親川要仁が担当した。レーベル情報を整理すると、表 1 のようになる。

音源を聴取したところ、《散山節》と《百名節》は本歌の歌詞で歌われていなかった。

また、金武町教育委員会にはレコードと共に歌詞カードも所蔵されている。ジャンル名、曲名、歌手・演奏者名、歌詞が記載されていた。[TM 2000] B 面の歌詞カードは、写真 2 を参照されたい。SP 3 枚共、A 面の歌詞カードには仲宗根勝次郎、仲宗根光子の顔写真、親川要仁がマンドリンを演奏する写真も掲載された。

歌詞カードに顔写真を添える試みは、日本コロムビアなどメジャー・レコードではよく見受けられる。しかし、沖縄音楽の自主制作レーベルにおいては珍しく、SPでは今回ミヤギ・レコードで初めて確認できた。

1.1.2 録音した歌手・演奏家の経歴

1947年制作のレコードには仲宗根勝次郎、仲宗根光子、親川要仁の3名が参加した。個々の経歴について、整理する。

(1) 仲宗根勝次郎 (1902-1969、沖縄県本部町並里出身)

仲宗根勝次郎は沖縄県本部町並里出身¹⁾であり、沖縄からペルー、さらにロサンゼルスへ移住した人物である。『北米沖縄人史』では仲宗根の経歴を次のように紹介している。

仲宗根勝次郎は1902年沖縄県本部村（筆者註：現本部町）に生まれ、1929年に呼寄移民としてペルーへ渡航した。1943年の大戦中は米国に抑留され、1946年にカリフォルニア州ロサンゼルスに移住、ボーデンハウスを経営のかたわら沖縄音楽の指導に努めた。1951年に沖縄音楽同好者に呼びかけて北米沖縄芸能保存会を結成した。その初代会長となり沖縄古典音楽普及と発展の基礎を確立した。沖縄より池宮城喜輝（筆者註：戦後池宮に改姓：1998『芸能人物事典』：36）、幸地亀千代の両先生を招聘して古典音楽の真髄を紹介するなどあらゆる機会をつかんで沖縄芸能を広くアメリカ社会に紹介した。（下線部筆者）（北米沖縄人史編集委員編1981：597-598）

本論では上記の文献を基に、仲宗根の生年を1902年とした。また、没年については「惜しくも67歳で亡くなった」（北米沖縄人史編集委員編1981：521）との記述から、1969年とした。沖縄からペルーに移民として渡航した時期については、上記の「1929年に呼寄移民としてペルーへ渡航した」との記述以外に、「1926年ペルーに渡り」²⁾との記録もある。仲宗根の出身地・本部町は移民名簿を公表していないため、渡航年を特定することが難しい。

次に、最初に移住したペルーにおける活動について整理する。仲宗根はペルーにて「琉楽の研究に精進し、かたわら後輩の指導に尽力、自ら音楽同好会を創立しその指導の任に当たった」³⁾。研究成果の発表としては、「昭和9年11月9日、仲宗根師を中心に2、30名の同好者が集い、演奏会を催した」⁴⁾との記録がある。また、「昭和15年3月3日、仲宗根勝次郎師範と屋比久

孟清氏の尽力により『琉球音楽野村流同好会』創立」⁵⁾に至った。仲宗根はペルーで初めて琉球古典音楽の演奏家における組織化を進めた人物の1人であった。

さらに、「伊差川世瑞氏の『声楽譜つき工工四』が発行されてから、仲宗根勝次郎、屋比久孟清両氏がこの工工四で指導するようになった」⁶⁾との記述がある。『声楽譜つき工工四』とは、1935年伊差川世瑞と世禮國男が共著で発行した『声楽譜附工工四』（野村流音楽協会）を指すと思われる。だが、ペルーで『声楽譜附工工四』を入手した方法は不明である。なお、工工四とは三線の勘所を文字で表した表音譜を指す。

仲宗根がペルーからロサンゼルスへ移住した経緯について、次のような記述がある。

仲宗根師範はペルー在住時代に、郷土芸能の保存とその普及のため、数多くの沖縄音楽家を養成されたが、過ぐる日米開戦後間もなく、有力な敵国外人として米国外人収容所に収容されておられました。終戦直後解放されましたがペルー帰還を断念し、米国滞留を決意、北米の楽土ロスアンゼルス市に身を落ちつけるようになりました。⁷⁾（下線部筆者）

共に同じ収容所で過した仲村権五郎によると、正確には「テキサス州クリスタル・シティ敵国外人収容所」⁸⁾に収容されたと言う。移住する地域にロサンゼルスを選択した理由として、比嘉廉雄は「同年（筆者註：1945年）暮に氏は夫人の親戚にあたる中矢善英氏の居住する羅府へ」⁹⁾と記している。つまり終戦後に収容所のあるテキサス州からカリフォルニア州ロサンゼルスへ移住したといえる。

仲宗根はロサンゼルスへ移住後、琉球古典音楽の指導を積極的に行い、子弟を育成した。北米沖縄芸能保存会会員の崎原源次郎は仲宗根の指導について、次のように述べている。

同師の野村流工工四に基く正統な指導は、自ら芸能愛好家を統一し、琉球音楽開花のきっかけを作ったものである。当時は各キャンプから帰還したばかりで会場はなく、家から家へと雨の日も風の日もいとわず教え続けた師の芸道一筋に行きぬく熱意には頭がさがり、それが一段と励みになったものである。¹⁰⁾（下線部筆者）

上記から沖縄系移民の家々を訪問しながら子弟を指導した様子が伺える。後に「自宅を提供して、琉球音楽の手ほどきを始めた」（北米沖縄人史編集委員編

1981:593)。また、「野村流工工四に基く正統な指導」とは『声楽譜附工工四』がペルーのみならず、ロサンゼルスでも古典音楽を伝承する際に重要な役割を果たしたことを示している。

その後、「琉球古典音楽並に舞踊を研究し祖先伝来の遺産文化である芸能を保存し併せて会員相互の親睦を計る目的で、1951年2月17日に西羅府日本学院ホールで北米沖縄芸能保存会の発会式が挙げられた」(北米沖縄人史編集委員編 1981:598)。仲宗根は北米沖縄芸能保存会の初代会長を務めた。

また、「1953年北米大陸に師範が誕生したのは彼が最初」(北米沖縄人史編集委員編 1981:598)という記述がある。調査を進めた結果、野村流音楽協会『会誌ちゃんな 創刊号』には師範免許状を29番目に取得した者として、仲宗根勝次郎の氏名を確認できる(野村流音楽協会会誌編集室 1979:120)。

1965年5月15日、ロサンゼルスの高野山ホールにて、北米沖縄芸能保存会の主催により、「仲宗根勝次郎師範謝恩演芸会」が開かれた。『仲宗根勝次郎師範謝恩演芸会記念誌』¹¹⁾には沖縄、ペルー、北米から多くの祝辞が寄せられ、仲宗根が沖縄音楽の普及・発展に精力を注いだ軌跡が綴られている。出演した数多くの子弟の中に、ミヤギ・レコードで共に録音した親川要仁の名前も見られる。この演芸会は仲宗根の音楽活動の集大成として位置づけられる。

(2) 仲宗根光子 (生没年不明)

仲宗根光子については、出身地、生没年が不明である。ただし、下記の文献から光子は勝次郎の娘であることが判明した。

戦時中に南米ペルー国から強制的に米国の収容所に移住させられて来た日系人数家族の中に故仲宗根勝次郎夫婦と娘の光子が居た (今では3人共故人となった)。(下線部筆者)(北米沖縄人史編集委員編 1981:521)

上記の文献は1981年に発行されているため、光子は1981年以前に逝去したと推察される。

(3) 親川要仁 (生没年不明、沖縄県本部町並里出身)

親川要仁は沖縄県本部町並里出身¹²⁾であり、仲宗根勝次郎と同郷である。沖縄系社会は地縁血縁のつながりが極めて強く、2人は異郷の地に暮らす同郷者であった。戦前ロサンゼルスにおける沖縄県人会の活動と親川について、次のような記述がある。

戦前南カリフォルニア州で沖縄県人の主なる集会地はロサンゼルスとインペリアルバーリーであった…中略…その頃ロサンゼルスでも、在米沖縄青年会主催の県人ピクニックが開かれ、ここでの地方(筆者註:地謡。三線伴奏の意)と振り付は親川要仁と崎原幾盛両氏であつた。それ以来沖縄芸能によりピクニックが益々盛んになった。1928年にはロサンゼルスで、沖縄海協南加支部の大ピクニックが催され、親川要仁と崎原幾盛等も自ら盛んにうたい踊った。(下線部筆者)(北米沖縄人史編集委員編 1981:589)

沖縄県人会の平良覚吉、親川要仁、崎原幾盛、大兼久正寿、上間政之、山端太佐、徳田信勇、岸本永昌其の他の人々が仕事の余暇を見つけては会員の子供、娘、主婦達に沖縄舞踊を教えてきた。1934年8月に市の公園局の許可を得て、エリーシャン公園内の9号地に舞台を設け、引き幕や背景などみんな会員の手で作って華やかにピクニックを開催したのが沖縄芸能の始まりであった。これは1934年から1940年まで続いた。(下線部筆者)(北米沖縄人史編集委員編 1981:592)

上記2件の文献から、親川は戦前ロサンゼルス在住の沖縄系移民に琉球舞踊を教授していた人物だということがわかる。さらに、県人会会員の親睦を深めるピクニックの場では、歌や舞踊に三線で伴奏すると共に舞踊の振り付けも担っていた。北米沖縄人史編集委員編 1981:592には「当時の芸能活動家」の項目に地方・立方の1人として、親川の名前が挙げられた。よって、当時親川は三線演奏、琉球舞踊、役者として多彩に活躍していたことが推察される。なお、上記には次項で紹介する崎原幾盛の名前も挙がっており、2人は同時期に活動していたと捉えられる。

1951年に設立された北米沖縄芸能保存会において、親川は評議員として名を連ねている(北米沖縄人史編集委員編 1981:599)。さらに、1960年1月、野村流音楽協会会長・幸地亀千代氏渡米を期に親川親生会を発足した(北米沖縄人史編集委員編 1981:592)。会発足には既に師範免許を取得していた仲宗根勝次郎が親川を推薦し、師範免許を受領したという背景がある(北米沖縄人史編集委員編 1981:598)。実際、野村流音楽協会『会誌ちゃんな 創刊号』には師範免許状を31番目に取得した者として、親川の氏名が確認できる(野村流音楽協会会誌編集室 1979:120)。だが、「親川要仁夫妻、新垣時子は1966年に沖縄に帰郷、北米沖縄クラブ主催の送別会があり、宮城会長(筆者註:宮城栄吉)より感謝状と記念品を贈呈された」(北米沖縄人史編集

委員編 1981:610)。理由は不明だが、1966 年にロサンゼルスから沖縄へ帰郷し、米国を後にした軌跡を確認することができた。

(4) ミヤギ・レコードを聴いた人々

次に、1947 年制作の SP を実際に聴取した人々について調査を進めた。その結果、ペルー時代から仲宗根と親しかった元リマ日報記者・比嘉廉雄による下記の記録をみつけることができた。

戦時、仲宗根氏と私は、こちらへ別々に送られてきたが、終戦はテキサス州クリスタルキャンプで一緒だった。同年暮に氏は…中略…羅府へ、私は翌年にニュージャージー州シーブルック・ファームの工場へと再び別れた。…中略…ちょうどその頃、仲宗根氏の羅府で

吹き込んだ数枚 1 組のレコードが送られてきた。それを聞いていると不思議に慰められ、終戦間もない混乱期に希望を取り戻し、勇気づけられたことがある。私がシーブルックを引揚げ、羅府に住みついたのが 1950 年。¹³⁾ (下線部筆者)

上記の「仲宗根氏の羅府で吹き込んだ数枚 1 組のレコード」とは、1.1 で紹介した SP を指している。本論では 3 枚の SP が確認されたが、他にも数枚制作した可能性がある。また、比嘉は「シーブルックを引揚げ、羅府に住みついたのが 1950 年」と記しており、1950 年より以前に仲宗根の SP を聴いたと判断できる。仲宗根は 1947 年 (1950 年の 3 年前) に録音・制作しており、比嘉の記録と一致する。比嘉の上記の記録は、SP が確かに聴かれていたことを示す重要な証言である。

写真 1 SP『七尺節・揚七尺節』ミヤギ、TM-2000-B



写真 2 歌詞カード『七尺節・揚七尺節』ミヤギ、TM-2000-B

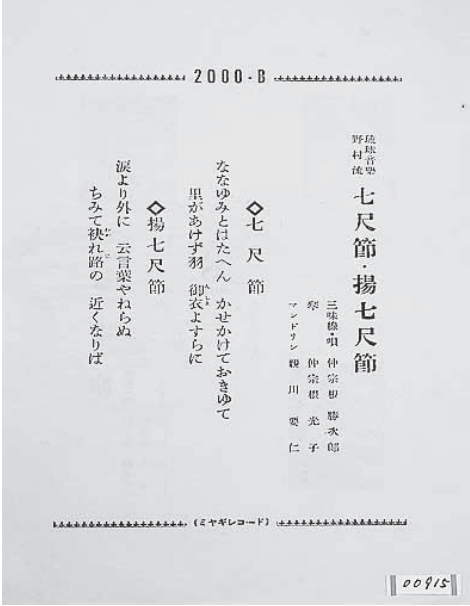


表 1 1947 年ミヤギ・レコード録音曲目一覧 (金武町教育委員会所蔵) 作成：高橋美樹

レコード番号	記載ジャンル	分類	曲名	歌手・演奏者	レーベル	歌詞カード
TM 1007-A	琉球音楽・野村流	古典	出砂節	三味線・唄:仲宗根勝次郎, 琴:仲宗根光子,マンドリン:親川要仁	黒地・白文字	有り/演奏者顔写真
TM 1007-B	琉球音楽・野村流	古典・古典	辺野喜節・芋の葉節	三味線・唄:仲宗根勝次郎, 琴:仲宗根光子,マンドリン:親川要仁	黒地・白文字	有り
TM 2000-A	琉球音楽・野村流	古典	散山節	三味線・唄:仲宗根勝次郎, 琴:仲宗根光子,マンドリン:親川要仁	黒地・白文字	有り/演奏者顔写真
TM 2000-B	琉球音楽・野村流	古典・古典	七尺節・揚七尺節	三味線・唄:仲宗根勝次郎, 琴:仲宗根光子,マンドリン:親川要仁	黒地・白文字	有り
TM 2001-A	琉球音楽・野村流	古典	述懐節 (二揚調)	三味線・唄:仲宗根勝次郎, 琴:仲宗根光子,マンドリン:親川要仁	黒地・白文字	有り/演奏者顔写真
TM 2001-B	琉球音楽・野村流	古典	百名節	三味線・唄:仲宗根勝次郎, 琴:仲宗根光子,マンドリン:親川要仁	黒地・白文字	有り

1.2 ミヤギ・レコード（1951 年制作）（表 2 参照）

本節では南風原文化センター所蔵の 1951 年制作 SP 3 枚 [TM 227] [TM 228] [TM 229] を紹介する。なお、大阪人権博物館にも池宮喜輝が録音したミヤギ・レコード 5 枚が所蔵されている。仲間恵子によると、上記 3 枚の他に、A 面《かぎやで風節》B 面《こてい節》1 枚、A 面《伊野波節(上)》B 面《伊野波節(下)》1 枚を所蔵している（仲間 2007:154）。

レーベル情報の商標、表記、スタジオ名は 1947 年制作の SP と同じである。ただ、レーベルの配色が異なり、赤地に金文字で記された。実際のレーベルは、写真 3 SP『仲間節』を参照されたい。また、調査の結果、レーベルに記載された制作年と事実が異なっていることが判明した。レーベルには「PRINTED IN U.S.A. COPYRIGHT 1947」とあるが、実際に制作されたのは 1951 年である。その根拠として下記 2 件の文献を挙げたい。

昭和 26 年、私が以前ロサンゼルスに滞在中、古典曲をレコードに録音した際、仲間節を伊江先生にお送りした所、期待に反し伊江先生は「池宮は不都合千万だ。仲間節は是非『夕も暁もなれしおもかげの』でなければ実感が湧かぬ」と大変お叱りを受けて恐縮した。実はこの仲間節の歌詞を自詠の「寄ゆる年波や露ほどもおまぬ」で吹込んであったからである。そこでハワイに行ってから更に「夕も暁も」でやり直してお送りしお詫びをした事があった。¹⁴⁾（下線部筆者）

「米本土では『伊野波節』『二上り』など独唱をレコードにして来た」（1951 年 12 月 8 日『ハワイ報知』:4）

文献 1 件目は録音した池宮本人の文章である。池宮は 1951 年野村流の演奏指導のためハワイと北米を訪問し、その際古典音楽を録音したことが述べられている。実際、南風原文化センター所蔵の SP にも [TM 227] の A 面に《仲間節》が録音されていた。文献 2 件目は 1951 年池宮がハワイ訪問時に語った記事の一部である。この記事も 1951 年に《伊野波節》《二上り》を録音した根拠となり得る。《伊野波節》は大阪人権博物館所蔵の SP に含まれている。また、《二上り》とは《述懐節（二揚調）》を指し、[TM 229-B] に収録された。上記の文献により、池宮が 1951 年に録音したのは確実であろう。1947 年制作のレーベル原版を基に印刷したため、以前の「1947」がそのまま残ったと推察される。

1.2.1 録音曲目と使用楽器

レコード 3 枚の曲目は以下の通りである。[TM 227]

は A 面《仲間節》、B 面《干瀬節》である。[TM 228] は A 面《子持節》、B 面《散山節》である。[TM 229] は A 面《仲風節》、B 面《述懐節（二揚調）》で、計 6 曲である。ジャンル分類すると、6 曲全て古典音楽であった。

レーベルには「琉球音楽・野村流」と記載され、1947 年制作 SP と同様、野村流の歌を収録している。演奏者の役割について、「唄」「三味線」「琴」に分けて記載した。1947 年制作 SP にはマンドリンが加わっていたが、1951 年制作 SP は琉球楽器のみで演奏されていた。全曲共、三味線と唄を池宮喜輝、琴を仲宗根光子が担当した。レーベル情報を整理すると、表 2 のようになる。

1.2.2 録音した歌手・演奏家の経歴

池宮喜輝と仲宗根光子が録音に参加した。光子は 1.1.2(2)で紹介したため省略する。

(1) 池宮喜輝（1886-1967、沖縄県那覇市出身）

池宮は 1909 年に野村流師範・我謝秀益の門下生となり、琉球古典音楽を学んだ人物である。1952 年野村流音楽協会第 5 代目会長に就任し、その後 11 年間その運営発展に大きく貢献した（1998『芸能人物事典』36 参照）。池宮は 1951 年～1952 年に「沖縄本島をはじめ、日本・北米・ハワイ・南米各地を行脚した際に、自身で鑑定した多くの三味線の名器を世に紹介」（1998『芸能人物事典』36）するべく、1954 年に著書『三味線宝鑑』を出版した。同著では「三味線審査（戦後の三味線 9441 丁〔うちハワイ 4000 丁〕のなかから 363 丁を選び写真で記録）、三味線の歴史、三味線図譜、三味線の型、五開鐘ほか名器などに触れている」（阿波根 1983:156）。

仲宗根勝次郎との接点について、池宮は次のように述べている。

仲宗根師範と私の関係は、丁度去る昭和 26 年並に 38 年の 2 回に渡り招かれて北米を訪問したとき、仲宗根師範宅に前後 7 ケ月間宿泊して音楽を指導し共に研究したのである。¹⁵⁾

池宮は仲宗根宅に滞在しつつ、北米沖縄系移民の古典音楽演奏家を対象に「琉球音楽史発声法、発音法、歌詞、思ひ入などに就いて指導」（1951 年 12 月 8 日『ハワイ報知』:4）した。ミヤギ・レコードによる録音は、1951 年第 1 回目の訪米の際に行われた。

その他の接点として、池宮が各地で三味線調査を開始する際、1952 年 1 月に審査委員を任命した。北米で

は下記の体制で審査が実施されたとの記録がある。

(2) 北米ロサンゼルス市

審査委員長 著者 池宮喜輝

審査委員 北米ロサンゼルス市 野村流音楽師範

仲宗根勝次郎

三味線現存数(ロサンゼルス市) 50丁

内審査合格登録数 2丁 (池宮 1987:110)

池宮は北米で古典音楽の指導を精力的に展開していた仲宗根を審査委員に任命し、全幅の信頼を置いていた。また、池宮が多年愛用していた江戸与那型三線を1951年8月渡米記念として仲宗根に譲った記録が写真と共に掲載されている(池宮 1987:297)。審査員の任命、さらに、愛用の三線を寄贈するという2つの大きな出来事が池宮と仲宗根の接点として浮かび上がる。

仲宗根が初代会長を務めた北米沖縄芸能保存会の活動として、「1951年9月15日沖縄音楽野村流師範の池宮城喜輝氏歓迎演芸会を西本願寺ホールにて開催盛況」(北米沖縄人史編集委員編 1981:599)との記録がある。この歓迎会の際に撮影したと思われる写真が池宮 1987に掲載された。写真のタイトルは「北米羅府に於ける著者歓迎の夕」である。「向って左より琴一翁長幸子、仲宗根光子、上里加美子。向って左より三味線一山端太左…中略…師範仲宗根勝次郎、著者池宮喜輝…中略…親川要仁(1951年9月)」(下線部筆者)と解説した。この写真は1951年に池宮が北米を訪問した痕跡であり、仲宗根勝次郎、仲宗根光子、親川要仁ら、1947年、1951年の録音に参加した人物が確認できる。

2 トーホー・レコード制作のSPレコード(表3参照)

2では金武町教育委員会に所蔵されたトーホー・レコード2枚を取り上げる。まず、レーベル情報を整理する。実際のレーベルは、写真4 SP『アメリカ節』を参照されたい。

レーベルは白地に黒文字であり、最上部には「REGISTERED COPYRIGHT」、その下にレーベル名の「TOHO RECORD」が表記された。このレコードの著作権はトーホー・レコードが所有していることを示す。注目すべきは「TOHO」と「RECORD」の間に、録音者の崎原幾盛と思われる顔写真が掲載されたことである。最下部には「TOHO RECORDING CO L. A NON-COMMERCIAL USE」と刻印され、非商業用としてロサンゼルスで録音された。つまり、市場で流通・販売することを目的としたレコードではない。なお、制作年は不明である。

2.1 録音曲目と使用楽器

SP2枚の曲目について紹介する。[M.R.S.21]はA面《アメリカ節(想ひ出す故郷)》、B面《テマト》である。[M.R.S.22]はA面《天川節》、B面《本カナヨ》で、計4曲である。《アメリカ節(想ひ出す故郷)》のみ「崎原流儀」と記載され、その他の楽曲には「民謡」と表記された。

ジャンル分類すると、古典音楽が1曲、民謡が2曲、新民謡が1曲となった。レーベルには演奏者として、崎原幾盛の名前のみが掲載された。実際の音源では、三線の音色も歌声も共に聴き取ることができる。おそらく、唄と三線を崎原本人が演奏している。レーベル情報を整理すると、表3ようになった。

《アメリカ節(想ひ出す故郷)》は琉球方言の歌詞を三線伴奏によって歌われる。「崎原流儀」と称していることから、崎原による作詞作曲だと推察される。移民したアメリカの地から故郷沖縄に向けた望郷の念を自作自演し、レコード化したと捉えられる。沖縄では敗戦直後の沖縄社会を風刺的に歌った《アメリカ節》¹⁶⁾があるが、音源を確認したところ同名異曲であった。

《テマト》《天川節》《本カナヨ》の3曲は、現在も沖縄の大衆に受け継がれている歌である。

《テマト》は一般的に《汀間堂》と表記し、沖縄県「名護市汀間に伝わる民謡。雑踊が振り付けられている……中略……歌詞は4番からなり、汀間村の百姓娘の丸目カナと首里士族で請人の神谷厚詮とのロマンスが中心となっている」(宜保 1983:844)。《本カナヨ》と《天川節》は「舞踊『加那よ一天川』で演唱される。前半は『加那よ一節』(筆者註:本論で言う《本カナヨ》)で踊り、後半を早弾きの『天川節』で踊る」¹⁷⁾。聴取したところ、《本カナヨ》は定番の歌詞1～8番で歌われ、囃子は「♪遊びイヤサンサー」と挿入される。現代版の囃子「♪ハルヨ ンゾヨ 加那よ シーシ」(備瀬・松田編 2014:89)とは異なっていた。また、《天川節》には古典音楽と早弾き曲の2種類がある。崎原は早弾きの《天川節》(歌詞1～4番)を収録しており、本曲は別名《島尻天川節》とも称される。

2.2 録音した歌手・演奏家の経歴

2.2.1 崎原幾盛(生没年不明)

崎原幾盛に関する出身地、生没年は不明である。ただし、北米沖縄人史編集委員編 1981:611には、戦前(1900年～1941年)活躍した地謡の1人として崎原の名前が挙がっている。1.1.2(3)で紹介した北米沖縄人史編集委員編 1981:589でも、崎原が戦前、ロサンゼルスで沖縄県人ピクニック開催の折、舞踊や三線を積極

的に演奏していたことが確認できる。

一方、戦後になると、1951年発足の北米沖縄芸能保存会において、親川要仁と同様、評議員を務めている。さらに、1953年には「琉球音楽愛好者が、毎週3回琉球音楽の研究と後輩の指導、並びに普及発展に務める目的で新規に北米沖縄芸能研究会を結成させた」(北米沖縄人史編集委員編 1981:591)。この研究会で崎原は副会長を担当しており、会発足の発起人にも名を連ねている。よって、研究会の立ち上げの際、重要な役割を果たした人物だと推察できる。

北米沖縄芸能保存会と北米沖縄芸能研究会では趣旨

や目的がどのように異なるのか、参加者の相違など、詳細は不明である。ただ、日本国内外における琉球古典音楽演奏家の組織化を辿ると、1団体に限定せず、複数の団体が同時期に組織される、あるいは1団体が後に分裂するケースが多い。高橋 2016b ではブラジルの沖縄系社会において、野村流音楽協会ブラジル支部と野村流古典音楽保存会ブラジル支部が同時期に設立され、双方が活動を展開した事例を紹介した。ロサンゼルス事例も、複数団体がほぼ同時期に設立される琉球古典音楽特有の現象に数えられる。

写真3 SP『仲間節』ミヤギ、TM-227-A



写真4 SP『アメリカ節』トーホー、MRS-21-A



表2 1951年 ミヤギ・レコード(南風原文化センター所蔵) 作成: 高橋美樹

記載年	録音年	レコード番号	記載ジャンル	分類	曲名	歌手・演奏者	レーベル色
1947	1951	TM 227-A	琉球音楽・野村流	古典	仲間節	三味線・唄:池宮喜輝, 琴:仲宗根光子	赤地・金文字
1947	1951	TM 227-B	琉球音楽・野村流	古典	干瀬節	三味線・唄:池宮喜輝, 琴:仲宗根光子	赤地・金文字
1947	1951	TM 228-A	琉球音楽・野村流	古典	子持節	三味線・唄:池宮喜輝, 琴:仲宗根光子	赤地・金文字
1947	1951	TM 228-B	琉球音楽・野村流	古典	散山節	三味線・唄:池宮喜輝, 琴:仲宗根光子	赤地・金文字
1947	1951	TM 229-A	琉球音楽・野村流	古典	仲風節	三味線・唄:池宮喜輝, 琴:仲宗根光子	赤地・金文字
1947	1951	TM 229-B	琉球音楽・野村流	古典	述懐節 (二揚調)	三味線・唄:池宮喜輝, 琴:仲宗根光子	赤地・金文字

表3 トーホー・レコード録音曲目一覧(金武町教育委員会所蔵) 作成: 高橋美樹

レコード番号	記載ジャンル	分類	曲名	歌手・演奏者	レーベル色
M.R.S. 21-A	崎原流儀	新民謡	アメリカ節 (想ひ出す故郷)	唄:崎原幾盛	白地・黒文字
M.R.S. 21-B	民謡	民謡	テマト	唄:崎原幾盛	白地・黒文字
M.R.S. 22-A	民謡	古典	天川節	唄:崎原幾盛	白地・黒文字
M.R.S. 22-B	民謡	民謡	本カナヨ	唄:崎原幾盛	白地・黒文字

3 吉レコード制作の SP レコード（表 4 参照）

吉レコード制作による SP 5 枚を取り上げる。所蔵機関は金武町教育委員会と南風原文化センターである。

初めに、レーベル情報を整理する。実際のレーベルは、写真 6 SP『述懐節』、写真 8 SP『あこがれの布哇』を参照されたい。レーベルは青地に白文字で記された。レーベル最上部には、商標として丸で囲んだ(吉)の文字がある。その下に「琉球音楽野村流」と流派が記載された。しかし、制作年、録音スタジオ、制作した国名など、録音に関する詳細は記されていない。録音者の宮城栄吉は 1956 年にハワイからロスアンゼルスへ移住した人物である。録音地の特定は難しいが、ハワイ在住の真栄城お豊と共演していることから、移住以前にハワイで録音したと推察される。

3.1 録音曲目と使用楽器

金武町教育委員会には SP 5 枚、南風原文化センターには SP 4 枚が所蔵されている。その中でも 4 枚が共通であるため、のべ 5 枚の SP が確認できた。

曲目は以下の通りである。レコード番号 [A] は 1 面《仲間節》、2 面《かちやで風節》である。レコード番号 [B] は 1 面《伊江節》、2 面《ばしの鳥節》である。[C] は 1 面《石之屏風節》、2 面《ばちくわい節》である。[D] は 1 面《干瀬節》、2 面《花風節》である。[E] は 1 面《述懐節》、2 面《あこがれの布哇》で計 10 曲である。ジャンル分類すると、古典音楽が 7 曲、民謡が 1 曲、新民謡が 2 曲となった。

レーベルには演奏者に関する表記があるが、歌詞カードの内容と若干相違がみられる。加えて、レーベルと歌詞カードとでは [A-1] と [A-2] の内容が逆に印刷されている。よって、表 4 では双方を別々に掲載する。なお、下記の分析はより詳細な歌詞カード情報を優先した。

吉レコードは三味線、琴の琉球楽器のみで演奏している。さらに、楽器編成は 3 種類に分けられる。第 1 編成として、唄・三味線：宮城栄吉、琴：宮城美代が挙げられる。《仲間節》《述懐節》など古典音楽を演唱の際、この編成が採用された。第 2 編成として、唄・琴：真栄城お豊、三味線：宮城栄吉が挙げられる。宮城栄吉・作による新民謡《ばちくわい節》《あこがれの布哇》や八重山民謡《ばしの鳥節》などに用いられた。第 3 の編成として、唄・三味線：宮城栄吉、唄・琴：真栄城お豊が挙げられる。沖縄の祝いの席では欠かせない《かちやで風節》に採用された。つまり、楽曲に応じて楽器編成を組み、録音したと考えられる。以上のレーベル情報を整理したのが表 4 である。歌詞カードとして

は、写真 7 歌詞カード『述懐節』を参照されたい。

音源を聴取したところ、《仲間節》《干瀬節》《述懐節》の 3 曲は本歌の歌詞で歌われていなかった。《ばちくわい節》は作詞：比嘉盛勇、作曲：宮城栄吉による新民謡である。だが、喜納昌永・滝原康盛共著『琉球民謡工四』第 1 巻¹⁸⁾を調べた結果、原曲とその改訂曲という 2 種類の歌詞の存在が判明した。吉レコードを聴取したところ、本音源は原曲の歌詞 2 番～5 番で歌われていた。原曲のレコードとして、亀谷朝仁が歌ったマルテル・レコード制作の音源¹⁹⁾がある。改訂曲を収録したレコードとして、玉城安定が歌ったマルフク・レコード制作の音源²⁰⁾がある。上原直彦は《ばちくわい節》について「いまではエイサーにも組み入れられ、遠い昔からあったような顔で愛唱されているひと節」（上原 1986:77）と解説した。さらに、上原は作詞したハワイ移民・比嘉盛勇の言葉を次のように紹介している。

「ハワイという言葉そのものが、パラダイスと同義語として使われてきたが、実際にはその言葉とはほど遠く、ことに沖縄からの移民は血を吐く思いをしてきた。それだけに、異郷にいるからこそ、“ふるさとかくあれ！”という願いをこめて作詞した」（上原 1986:78）

比嘉盛勇は沖縄で大衆に支持された《でいご音頭》《夫婦船》などを作詞した人物である。《ばちくわい節》は異郷の地に身を置きながらも、沖縄への希望と人生の教訓を歌詞に織り込み、沖縄の人々に向けて発信した歌と捉えられる。

一方、《あこがれの布哇》は宮城栄吉が作詞作曲した新民謡である。那覇港から憧れのハワイに渡った後、故郷を懐かしむ心情が綴られている。歌詞には、人一倍働いてお金を稼ぎ、いつか沖縄に錦を飾って戻りたい、という沖縄系移民共通の願望が盛り込まれている。《あこがれの布哇》で宮城が描いた歌詞世界は、出稼ぎ先の大阪で普久原朝喜（1903-1981）が作詞作曲した《移民小唄》（1935 年録音）²¹⁾、《布哇節》（1937 年録音）²²⁾にも通じている（高橋・西岡・齊藤 2008 参照）。特に、那覇港は「琉球国時代から現代に至るまで海外・日本航路の船舶が出航する重要な港」（高橋・西岡・齊藤 2008:220）であり、沖縄移民における人生の分岐点として 3 曲共に登場している。

3.2 録音した歌手・演奏家の経歴

次に、録音に参加した宮城栄吉、宮城美代、真栄城お豊の経歴について整理する。

3.2.1 宮城栄吉（1904-没年不明、沖縄県与那城村屋慶名出身）

宮城栄吉は沖縄県中頭郡与那城村屋慶名で生まれた。「3歳の頃、父は移民として布哇に渡り、祖父母や母に育てられて小学校へ通う様になった」（宮城 1982:5）。祖父が琉球古典音楽に造詣が深かったため、「小学校1年生の頃から、毎日祖父が門下生に指導する側で見たたり聞いたりして、少しずつ覚える様になった」（宮城 1982:5-6）。三線の製作方法を身につける一方、「字屋慶名のエイサーの地方を務めた」（宮城 1982:6）。「1922年 18歳の時、父の呼寄で布哇に渡りました」（宮城 1982:6）という宮城の記述から、生年を1904年とした。

ハワイに移住後「1925年頃から、故仲真良永翁に師事して野村流音楽の稽古を」（宮城 1982:6）始めた。1932年に宮城音楽会を創立し、後進の育成を開始する。「1951年故池宮喜輝氏来訪の際、同氏の助言により宮城音楽会を宮城絃声会と改称」（宮城 1982:6）した。

1935年9月28日『ハワイ報知』には、宮城が30歳の時、沖縄に8ヶ月間滞在し、琉球古典音楽を修行した様子が次のように掲載されている。

当市（筆者註：ホノルル市）スミス街、野村流音楽愛好者にて、教師格の宮城栄吉氏は沖縄郷土芸能研究のため帰郷中那覇市野村流の権威、伊差川世瑞師に就き去る2月より8月迄日夜寝食を忘れて研究、上中下巻を通じ六十余典の講習を受け、免許証書を受け去る19日入港のジャパン号で帰布した²³⁾。

この記事には伊差川と宮城の写真、講習証書が掲載されており、研究成果をハワイへ還元してほしいという期待が伺える。宮城は「伊差川先生と世禮先生共著の声楽譜附工四上巻180冊を持参、ホノルル市ヌアヌ街の川上喜太郎氏御夫妻経営の店に販売を御願いし1ドル25仙で売っていただいた」（宮城 1982:7）という。宮城は1.1.2でも述べた『声楽譜附工四』上巻をハワイへ導入し、古典音楽の普及に一役買ったといえるだろう。なお、「琉球音楽家の系図」において、宮城は伊差川世瑞の高弟5名の1人として名を連ねている（野村流音楽協会編 1974:150）。

宮城は1952年野村流音楽協会の師範免許²⁴⁾を取得した。『会誌ちゃんな 創刊号』でも7番目に取得した者として宮城の名が確認できる（野村流音楽協会誌編集室 1979:120）。また、宮城は後に師範免許を取得する泉川寛永、山城真助、池原盛光らを育成し、ハワ

イにおける古典音楽の発展に多大な貢献を果たした（野村流音楽協会編 1974:150 参照）。

1956年宮城はハワイからロサンゼルスへ移転する。当地でも古典音楽の指導を積極的に実施した。1961年高野山ホール（ロサンゼルス）にて、宮城絃声会主催「野村流音楽師範宮城栄吉音楽教授30年記念演芸会」を開催した（北米沖縄人史編集委員編 1981:603）。1970年には北米沖縄芸能保存会（代表：仲宗根勝次郎）、宮城絃声会（代表：宮城栄吉）、錦風会（代表：仲真良金）の研究所を中心に、野村流音楽協会北米支部が設立された。初期の会員数は59名である（北米沖縄人史編集委員編 1981:594）。宮城は初代北米支部長に選出され、三代支部長も務めた。

1974年高野山ホールで、宮城栄吉・美代夫妻の送別会が開催された。「母親の米寿祝や家庭の都合で帰沖される」（北米沖縄人史編集委員編 1981:382）とあるが、1979年『会誌ちゃんな 創刊号』:219には宮城のロサンゼルス在住が記載されている。当初帰沖する予定だったが、何らかの理由により中止したと推察される。

現在、沖縄県立図書館には1971年発売LP7枚組『りゅうきゅう舞踊曲全集』が所蔵されている。沖縄、関西、ハワイ、ロスアンゼルスで活躍する野村流の演奏家が沖縄・極東放送スタジオで録音した音源である。琉球舞踊家の独習・実演用に録音されたLPには、《東細節》（歌・三味線：宮城栄吉、琴：宮城美代）が収録され、経歴も紹介されている。

3.2.2 宮城美代（生年不明-1978、沖縄県与那原町出身）

宮城美代は箏演奏家で、栄吉の妻である。「沖縄県与那原出身…中略…1928年からハワイ・ホノルルで仲真良永に師事、後川上善子の指導を受け1964年7月師範免許受領」（北米沖縄人史編集委員編 1981:622）との記録がある。川上は栄吉に師事しており、ハワイ箏曲界の中心的人物であった。布哇タイムス編輯局編 1954:143には美代が主宰する宮城壽会の記載があり、子弟の育成に力を注いでいたことが伺える。1956年ロサンゼルスに移住後は、1964年に発足した野村流興陽会北米支部長を務めた。北米支部発足当時、師範免許状取得者は美代1人であった（北米沖縄人史編集委員編 1981:617）。先述のLP『りゅうきゅう舞踊曲全集』経歴欄には、師匠は川上善子、音楽歴は42年と記載されている。

3.2.3 真栄城お豊（1911-没年不明、ハワイ州オアフ島ワヒアワ出身）

真栄城お豊の生年と出身地は比嘉 1978:57に拠る。

経歴は以下の通りである。

1916 年渡沖、1925 年に帰布。1934 年岸本貴美夫人より箏の手解き、1941 年訪沖し仲里陽史子師範に師事すること 5 ヶ月。1945 年声楽を宮城栄吉師、箏曲を川上善子に学ぶ。1955 年と 1962 年に渡沖し幸地ナへ師範に師事。1963 年師範免許…中略…1976 年興陽会ハワイ支部初代支部長となる。(比嘉 1978:57)

1950 年ホノルル市で豊箏山会を設立し(ハワイ日本人移民史刊行委員会編 1964:572)、1953 年「豊箏山会々名披露大演芸会」を開催した(1953 年 3 月 7 日『ハワイ報知』2)。歌手・箏演奏家として活躍する姿は、「歌姫『お豊さん』と琴」と題された次の記事からも伝わってくる。

安里屋ユンタで売り出したハワイの歌姫真栄城お豊さんはラヂオ実演に赤嶺京子ばりの美声で県下を悩殺。池原盛光氏、フランス座波氏(故)とお豊さんはハワイの三羽鳥と謳われる。ハワイの女性で流行歌から大節まで琴と共に歌ったり弾いたりする人は滅多にいない。何はともあれハワイの沖縄流行歌ナンバーワンの折紙は万人の認めるところ。(下線部筆者)(比嘉 1951)

真栄城はトロピック・レコードから沖縄の代表的な新民謡 SP『安里屋ユンタ』を発売し、ハワイで一世を風靡した(高橋 2015:217)。赤嶺京子とは沖縄音楽専門のマルフク・レコードで多くの沖縄民謡を録音した昭和を代表する民謡歌手である。1つ目の下線部は、大衆から圧倒的な支持を集めた赤嶺に匹敵するくらい

真栄城の歌声が優れていたと捉えられる。2つ目の下線部は、流行歌から沖縄民謡、古典音楽まで幅広いジャンルをレパートリーとした人物だと読み取れる。

1964 年頃、宮城栄吉の弟子・泉川寛永と結婚した後は、泉川お豊の名で演奏活動を行った。LP『りゅうきゅう舞踊曲全集』には《踊くはでさ節》(歌・三味線: 泉川寛永、琴: 泉川お豊)、《花風》(歌・三味線: 泉川お豊)が収録された。なお、金武町教育委員会には、歌: 池原盛光・真栄城お豊、SP『終戦数え歌』(トロピック、108-A、発売年不明)も所蔵され、一世を風靡した歌声が確認できる。

写真 7 歌詞カード『述懐節』吉、E-1

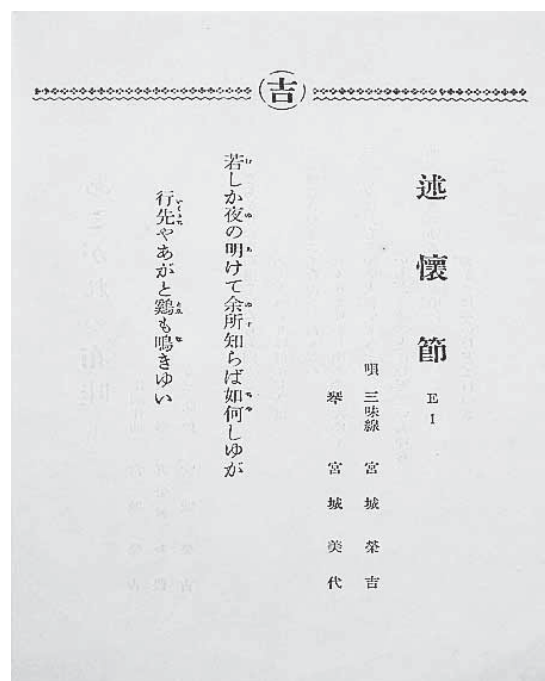


写真 6 SP『述懐節』吉、E-1



写真 8 SP『あこがれの布哇』吉、E-2



表 4 吉レコード録音曲目一覧（金武町教育委員会／南風原文化センター所蔵） 作成：高橋美樹

レコード番号	記載ジャンル	分類	曲名	レーベルの歌手・演奏者	歌詞カードの歌手・演奏者	レーベル色	歌詞カード	所蔵機関
A-1	琉球音楽・野村流	古典	仲間節	唄:宮城栄吉, 琴:宮城美代	三味線:宮城栄吉, 琴:真栄城お豊	青地・白文字	あり	金武町教育委員会
A-2	琉球音楽・野村流	古典	かぢやで風節	三味線:宮城栄吉, 琴:真栄城お豊	唄・三味線:宮城栄吉, 琴:宮城美代	青地・白文字	あり	金武町教育委員会
B-1	琉球音楽・野村流	古典	伊江節	唄:宮城栄吉, 琴:宮城美代	唄・三味線:宮城栄吉, 琴:宮城美代	青地・白文字	あり	金武町教育委員会/ 南風原センター
B-2	琉球音楽・八重山民謡	民謡	ばしの鳥節	唄・琴:真栄城お豊, 三味線:宮城栄吉	唄・琴:真栄城お豊, 三味線:宮城栄吉	青地・白文字	あり	金武町教育委員会/ 南風原センター
C-1	琉球音楽・野村流	古典	石之屏風節	唄:宮城栄吉, 琴:宮城美代	唄・三味線:宮城栄吉, 琴:宮城美代	青地・白文字	あり	金武町教育委員会/ 南風原センター
C-2	琉球音楽・民謡	新民謡	ばちくわい節 (作詞:比嘉盛男, 作曲:宮城栄吉)	唄・琴:真栄城お豊, 三味線:宮城栄吉	唄・琴:真栄城お豊, 三味線:宮城栄吉	青地・白文字	あり	金武町教育委員会/ 南風原センター
D-1	琉球音楽・野村流	古典	干瀬節	唄:宮城栄吉, 琴:宮城美代	唄・三味線:宮城栄吉, 琴:宮城美代	青地・白文字	あり	金武町教育委員会/ 南風原センター
D-2	琉球音楽・野村流	古典	花風節	唄・琴:真栄城お豊, 三味線:宮城栄吉	唄・琴:真栄城お豊, 三味線:宮城栄吉	青地・白文字	あり	金武町教育委員会/ 南風原センター
E-1	琉球音楽・野村流	古典	述懐節	唄:宮城栄吉, 琴:宮城美代	唄・三味線:宮城栄吉, 琴:宮城美代	青地・白文字	あり	金武町教育委員会/ 南風原センター
E-2	琉球音楽・民謡	新民謡	あこがれの布哇 (作詞作曲: 宮城栄吉)	唄・琴:真栄城お豊, 三味線:宮城栄吉	三味線:宮城栄吉, 琴:真栄城お豊	青地・白文字	あり	金武町教育委員会/ 南風原センター

4 まとめ

これまでの整理により、下記4点が指摘できる。

4.1 北米における琉球古典音楽団体の中心人物

ミヤギ・レコードで録音した仲宗根勝次郎と親川要仁は1951年発足の北米沖縄芸能保存会において中心的役割を果たした人物である。仲宗根は初代会長として、親川は評議員として組織の活性化に貢献した。

また、トーホー・レコードで録音した崎原幾盛も、北米沖縄芸能保存会の評議員を務めていた。さらに、1953年北米沖縄芸能研究会の発起人として名を連ね、副会長として活動を支えた。仲宗根は1940年ペルーにおいても琉球音楽野村流同好会を創設している。つまり、レコード制作を担った人物は、後に琉球古典音楽の組織化に多大な貢献を果たしていた。

4.2 池宮喜輝の訪米とその影響

池宮は1951年2月17日に発足したばかりの北米沖縄芸能保存会から招聘され、ロサンゼルスを訪れた。滞在期間は8月21日～12月4日であった（1951年12月8日『ハワイ報知』:4）。この池宮の来訪は琉球古典音楽の演奏指導のみならず、ミヤギ・レコードでの録音、江戸与那型三線を仲宗根へ寄贈するという、歴史的な事象を北米沖縄音楽界へもたらした。さらに、同年ハワイでは宮城栄吉の研究団体が池宮の助言により「宮城音楽会」から「宮城絃声会」へと改称する。つまり、組織名を変更させたのである。翌年1952年に野村流音楽協会第5代目会長となる池宮の来訪が、どれほどの影響を与えたかは想像に難くない。

1960年野村流音楽協会第6代目会長・幸地亀千代の訪米を契機に、親川が親川親生会を発足させたのも同様の事例である。

ブラジルでも同様の現象が起きている（高橋 2016a 参照）。例えば、1953年琉球音楽演奏家・研究家の山内盛彬が来伯したことを契機に、全伯琉球音楽舞踊保存研究会が発足した。1954年作曲家・金井喜久子が来伯したことで、1955年在伯野村流音楽協会が設立された。

北米の沖縄系移民の地でも、琉球古典音楽界を主導する人物の訪問が多大な現象を引き起こしたことが確認された。

4.3 伊差川世瑞・世禮國男『声楽譜附工工四』の活用

仲宗根はペルーにおいて、伊差川・世禮『声楽譜附工工四』を活用していた。期間は工工四発行の1935年から米国に抑留される1942年頃までだと推察される。北米沖縄芸能保存会会員の崎原源次郎も戦後仲宗根が『声楽譜附工工四』に基づく正当な指導を実践していたことを記している。ペルーのみならず、ロサンゼルスでも古典音楽を指導する際に『声楽譜附工工四』が重要な役割を果たしていた。

一方、宮城は1935年に沖縄から『声楽譜附工工四』上巻180冊をハワイへ持ち込み、古典音楽の普及に一役買っていたことが確認された。

4.4 沖縄への望郷の想いを自作・録音

崎原は《アメリカ節(想ひ出す故郷)》と題し、北米の地から故郷沖縄に向けた望郷の念を創作した。そし

て、三線伴奏により自作自演で録音した。また、宮城は那覇港から憧れのハワイに渡った後、故郷を懐かしむ心情を歌詞に盛り込み、『あこがれの布哇』と題し作品化した。古典音楽や民謡のみならず、移民として故郷を懐かしむ想いを自作に込め、録音したレコードの存在を確認できた。

謝辞

本論をまとめるにあたり、金武町教育委員会、南風原文化センターには貴重な音源資料を御提供いただいた。また、細川周平氏、小浜司氏、島添貴美子氏には多くの御助言、御教示をいただいた。ここに記して感謝申し上げたい。なお、本研究は日本学術振興会科学研究費（平成 29～32 年度、基盤研究(C)17K02365:研究代表者・高橋美樹）「沖縄音楽における現地録音の歴史的研究 一田辺尚雄から LP『沖縄音楽総覧』まで」の助成を受けたものである。

註

- 1) 池宮喜輝 1954:73 には下記の広告が掲載されている。北米ロスアンゼルス市 北米沖縄芸能保存会 会長師範 仲宗根勝次郎（沖縄国頭郡本部町並里出身）
- 2) 与那嶺豊松 1965「南米ペルーにて」『仲宗根勝次郎師範謝恩演芸会記念誌』沖縄芸能保存会、p.77
- 3) 前掲 2)
- 4) 前掲 2) 島袋盛亀・カメ・千恵子「所感」p.81
- 5) 前掲 2) 屋比久孟清「仲宗根勝次郎師範の謝恩演芸会を祝す」p.76
- 6) 1964 年 5 月 10 日「異郷に咲く沖縄芸能／池宮喜輝さん、北南米の旅から」『沖縄タイムス』p.3
- 7) 前掲 2) 翁長良彦「祝辞」p.14
- 8) 前掲 2) 仲村権五郎「沖縄芸能の至宝 仲宗根勝次郎氏」p.17。収容所名は下記の文献でも確認できる。前掲 2) 比嘉廉雄「芸道は国境を越えて」p.20
- 9) 前掲 2) 比嘉廉雄「芸道は国境を越えて」p.20
- 10) 前掲 2) 崎原源次郎「創立当時の思い出」p.20
- 11) 1965『仲宗根勝次郎師範謝恩演芸会記念誌』p.5 には仲宗根の顔写真、p.24 には北米沖縄芸能保存会会員の集合写真が確認できる。
- 12) 池宮喜輝 1954:73 には下記の広告が掲載されている。北米ロスアンゼルス市三街 1236 北米沖縄芸能保存会 教師 親川要仁 同 秀子（沖縄国頭郡本部町並里出身）
- 13) 前掲 2) 比嘉廉雄「芸道は国境を越えて」p.20
- 14) 池宮喜輝 1987「私の琉球音楽開眼の師—伊江朝助先生の御逝去を悼む—」『琉球芸能教範』月刊沖縄社、

p.538。初出は池宮喜輝 1957 年 12 月 11 日「伊江朝助先生の御逝去を悼む」『琉球新報』。伊江朝助顕彰会編 1964『伊江朝助先生を偲ぶ』pp.173-176 にも所収。

- 15) 前掲 2) 池宮喜輝「祝辞」p.10
- 16) 《アメリカ節》、CD『時代 金城実 戦時戦後をうたう』（シナルフォン、20NCD-1002、2003）所収。
- 17) CD『沖縄音楽の精髓(下)』（コロムビア、COCJ-30861～62、2000）大城學「《踊り天川節》曲目解説」p.24 参照
- 18) 喜納昌永・滝原康盛共著 1964《バチクワイ節（原曲）》『琉球民謡工工四』1 巻、琉球音楽楽譜研究所、pp.5-6。同書《バチクワイ節》pp.7-8。
- 19) 亀谷朝仁、EP『バチクワイ節』（マルテル、MT-1028、1966）
- 20) 玉城安定、EP『バチクワイ節』（マルフク、FS-48、1962）
- 21) 普久原朝喜、CD『チコンキーふくばる』（マルフク、ACD-3006、2003）所収。歌詞は備瀬・松田編 2014:41 参照。
- 22) 前掲 21) 所収。歌詞は備瀬・松田編 2014:291 参照。
- 23) 1935 年 9 月 28 日「野村流免許状を受け／宮城栄吉氏帰布」『ハワイ報知』p.5
- 24) 1953 年 5 月 9 日「西島師範送別演芸成功／二師範三教師に免状伝達」『ハワイ報知』p.4 には、野村流師範・西島宗二郎から宮城らへ師範免許状が渡される様子が掲載されている。

参考文献

- 阿波根朝松 1983「池宮喜輝」『沖縄大百科事典(上)』沖縄タイムス社、p.156
- 池宮喜輝 1954『琉球三味線宝鑑』東京沖縄芸能保存会
- 池宮喜輝 1987『琉球芸能教範』月刊沖縄社
- 伊差川世瑞・世禮國男 1998『声楽譜附工工四』上巻、野村流音楽協会（初版 1935）
- 上原直彦 1986『語やびら島うた』那覇出版社
- 宜保栄治郎 1983「汀間当」『沖縄大百科事典(中)』沖縄タイムス社 p.844
- 喜納昌永・滝原康盛共著 1964『琉球民謡工工四』1 巻、琉球音楽楽譜研究所
- 高橋美樹・西岡敏・齊藤郁子 2008「沖縄の新民謡《布哇節》（作詞作曲：普久原朝喜）の分析 —音楽学・言語学・文学的アプローチによる作品論—」『高知大学教育学部研究報告』68 号、pp.213-226
- 高橋美樹 2007「沖縄音楽レコード制作における〈媒介者〉としての普久原朝喜 —1920-40 年代・丸福レコ

ードの実践を通してー』『ポピュラー音楽研究』10号、
日本ポピュラー音楽学会、pp. 58-79

高橋美樹 2012「異郷で聴く沖縄民謡 ―北米・南米へ
越境した丸福レコードー』『高知大学教育学部研究報
告』72号、pp. 137-149

高橋美樹 2015「《安里屋ユンタ》の伝播・普及プロセ
ス ―レコードの分析を中心としてー』『高知大学教育
学部研究報告』75号、pp. 203-232

高橋美樹 2016a「日系新聞にみるブラジル沖縄系移民
のレコード制作 ―1930年代～1950年代を中心として
ー』『高知大学教育学部研究報告』76号、pp. 189-208

高橋美樹 2016b「沖縄・日本本土・ブラジルを越境・
還流する沖縄音楽レコード」根川幸男編『越境と連動
の日系移民教育史 ―複数文化体験の視座』ミネルヴ
ァ書房、pp. 209-231

仲間恵子 2007「太平丸福レコードと普久原朝喜 ―マ
ルフクレコード SP 盤目録の補足として」『大阪人権博
物館紀要』9号、pp. 154-178

野村流音楽協会編 1974『創立 50 周年記念誌』

野村流音楽協会会誌編集室 1979『会誌ちゃんな 創刊
号』野村流音楽協会

野村流音楽協会会誌編集室 1982『会誌ちゃんな 第2
号』野村流音楽協会

布哇タイムス編輯局編 1954『ハワイ事情 1954 年度版』
布哇タイムス社（ハワイ）

ハワイ日本人移民史刊行委員会編 1964『ハワイ日本人
移民史』布哇日系人連合協会

比嘉武信編 1951『布哇沖縄縣人寫真帖／附・布哇と沖
縄風景』（奥泉栄三郎監修 2008『初期在北米日本人の
記録／布哇編 第34冊』文生書院、所収）

比嘉武信編著 1978『ハワイ琉球芸能誌：ハワイ沖縄人
78年の足跡』

備瀬善勝・松田一利編 2014『歌詞集 改訂版 沖縄の
うた』キャンパス

北米沖縄人史編集委員編 1981『北米沖縄人史』北米沖
縄クラブ（カリフォルニア）

宮城栄吉 1982「我が野村流音楽歴 50 年の回想記」『会
誌ちゃんな 第2号』野村流音楽協会、pp. 5-12

1951 年 12 月 8 日「沖縄芸能保存に献身／池宮喜輝氏
抱負を語る」『ハワイ報知』p. 4

1953 年 3 月 7 日「真栄城お豊さん／豊箏山会披露」『ハ
ワイ報知』p. 2

1965『仲宗根勝次郎師範謝恩演芸会記念誌』沖縄芸能
保存会（ロスアンゼルス）

1998「池宮城喜輝」『芸能人物事典』人外アソシエーツ、
p. 36

参考音源

LP『りゅうきゅう舞踊曲全集』（リュオン企画、日本コ
ロムビア、RCM-1009、1971）

CD『沖縄音楽の精髓（下）』（コロムビア、COCJ-30861
～62、2000）解説：大城學